契丹人はなに語をはなしていたか

ユハ・ヤンフネン
Juha Janhunen

中国では三国時代というと魏・呉・蜀の時代がそうよばれているが、南宋と北宋代の東北アジアの歴史ももうひとつの三国時代のみなすことができる。このときの中国帝国は中国大陸の東南部のみを中心としていたが、その西北がわにある現在の甘粛省を中心とする地域、またその東北にある旧満州地域の南部のあたりにそれぞれの別の国家が存在していた。これら中国の二つの時代、北宋（九六〇―一一二七）、南宋（一一二七―一二七九）のうち、前者の時代に東北地域に契丹族のつくった遼朝帝国（九〇七―一一二五）があり、また後者の時代にはそのかわりに女真族のたてた金朝帝国（一一一五―一二三四）があった。これらに対して西の甘粛省の方にはずっとおなじ党項族の西夏王国（一〇三二―一二二七）が存在していた。

中世中国北部のこのみっつの王朝貴族のなかではのちの満州族の祖先になった女真族がかなりよくしられているが、契丹族と党項族については、くわしい資料がすくない。おそらく遼国も西夏国も中国中心部とおなじようにおおくの民族の政治的な結合体であったが、そのうち契丹人と党項人が別々の民族であったことはあきらかである。今回契丹人のはなしを中心に、このひとたちが民族的、言語的にどのような特徴をもっていたかということをすこし考察したいとおもう。この点でまず文化に関する資料が大切であるが、遼代の遺跡をみると、契丹人は仏教をうけいれた遊牧民族であったということがあきらかになる。かれらの出身地域は現在内蒙古自治区の赤峰市のあたりにあったこともよくわかる。以下では地理的関係と文化資料を考慮すると契丹人は蒙古人の一部ではなかったかという可能性について説明したい。

とはいえ、蒙古族は歴史的にわりあいにあたらしい民族である。現代の蒙古諸語はおそらくみんなチンギスカンのたてた蒙古帝国、またはそれをうけついだ中国の元朝（一二七九―一三六八）によって方々へちらされた蒙古部族の方言からできたものである。これは遼時代のはじめとくらべると随分あとの現象であるので、契丹人のはなしていたことばと現代蒙古諸語のあいだにそんなに直接な関係はないだろう。チンギスカンの蒙古人の本来の地域も遼朝の中心から北の方に大分はなれていたので、現代蒙古人が契丹人の子孫であるとはかんがえることはできない。どうしても契丹人と蒙古人の関係は女真族と満州族のような簡単な連続体にはならない。本当にどのような関係があったかということは、言語の資料をもっとよくしらべないとはわからない。

それでは契丹人はどのようなことばをはなしていたか？遼朝に関するおおくの歴史資料やいままでのこっている考古学的遺跡によると契丹人のことばについての資料は非常に少ない。すくない状態のうえに、この資料の大部分はまだよくわかってないということである。一体どのような資料があるかというと、三種類にわけられる。歴史資料と単語資料と文字資料である。

一

まず、歴史資料によると契丹族は本当に独自のことばをもっていたということがあきらかである。遼史や金史などをしらべると、契丹人と中国人、または契丹人と女真人のあいだに通訳の必要があったことがよくわかる。契丹語は遼代のときに全満州で国語になったので、金代にはいっても契丹語がまだよくつかわれていた。女真人の一部は契丹語とのバイリングアルであったともかんがえられる。勿論中国人との交流のために中国語もつかわれていたが、遼朝帝国のなかでは契丹語の方が威厳がおおきかったらしい。

二

歴史資料のなかにときどき契丹語の単語もでているが、これらは勿論契丹語の研究のために非常に大切な資料になるはずである。しかし残念なことに、この資料が一番おおくはいっている遼史は実際には元代のときかかれたものである。そのなかのいわゆる契丹語の単語は全部契丹語であるわけではない。あとの蒙古語や満州地域のほか言語の単語がはいっているかもしれない。そのうえに、本当の契丹語の単語も漢字でかかれているので、とてもよみにくいものである。こういう理由で世界の言語学者や東洋学者はいまでもこの資料がよくわからない。ある単語は蒙古語によくにているが、蒙古語とはまったくちがうものもおおいようである。

三

中世中国の王朝民族はそれぞれ自分の文字をもっていた。その一番最初なのは契丹人のつかったいわゆる契丹大文字と契丹小文字であった。この文字がいつか解明されたら契丹語が勿論よくわかるようになることはまちがいないが、いまの状態では両方の文字組織もまだ解明されてはいない。それでも契丹小文字の方が音節文字であることはあきらかである。この文字でかかれたわりあいおおくの資料の研究の結果、契丹語の構造についてかなりくわしい事実がでてきた。それに

よると契丹語がやはり蒙古語と満州語のような構造をもっていて、構造的にいわゆるアルタイ諸語のひとつであったとして問題ない。しかし、これは系統的な関係のことであるか、地域影響によることであるかということはこれだけでわからない。この点ではいままでの契丹小文字の研究でひとつの非常に大切なことがでてきた。それはすでにおおくの学者よりのべられた「五」という数詞と「ウサギ」という名詞の文字的な関係であるが、つまりウサギという名詞のなかには最初の文字として五という数詞がはいっているということである。これによくにた音韻的な関係が蒙古語にあるが、つまり蒙古語の五という数詞（tabun）とウサギという名詞（taulai）は音韻的にににているということである。このような現象はこの地域の言語のなかで蒙古語にしかないので、契丹語が蒙古語と関係があったらしいということになる。

しかし、契丹語と蒙古語のあいだにはどのような関係があるかというと、どうしてもよくわからない。この点で民族史と比較言語学からの資料がすこし役にたつとおもう。

四

満州地域の民族史をみると言語的に大体ふたつの系統の民族、つまりモンゴル系民族とツングース系民族がくにをつくった。このふたつは歴史的に政権の座を交替したらしい。

一番最近の時代からはじめると、中国の清朝はツングース系の満州族によって、元朝はモンゴル系の蒙古族によってたてられたものであった。金朝はツングース系の女真族のものだったので、遼朝はやはりモンゴル系の民族にあたるのではないかということになる。もっとまえのことでは、唐代のときの東南満州、および北朝鮮のあたりの渤海国（六九八―九二六）はおおくの学者によりツングース関係の民族のつくったものとしてかんがえられているが、それに対してもうすこしまえの西南満州の北魏朝（三八六―五五〇）はおそらくモンゴル関係の拓跋族によってたてられたものであった。拓跋族のことばをトルコ系の言語としてみてる意見も発表されたが、現在の学者たちによるとモンゴル関係理論の方がただしそうである。実際には契丹語は拓跋語の継承者としてかんがえてもよいかもしれないが、両方とももっとまえの鮮卑族の言語からできたものである可能性もある。

五

比較言語のたちばから契丹語はモンゴル系言語よりモンゴル関係言語とよばれた方がよいとおもう。なぜかというと、モンゴル系言語とは現在の蒙古諸語の意味でチンギスカンのころのプロトモンゴル語（Proto-Mongolic）という言語の子孫であるが、契丹語はもっとまえのモンゴル関係言語であったのでプロトモンゴル語とはちがう言語であったわけである。ただプロトモンゴル語のもっとふるいかたちとしてかんがえてもいけない。それよりもパラモンゴル語（Para-Mongolic）とよばれた方がただしいとおもう。このパラモンゴル語はどのような言語であるかというと、あとのプロトモンゴル語の兄弟としてかんがえてもよい。パラモンゴル語はあとのプロトモンゴル語とおなじようにおそらく段々いくつかの言語にわかれてきたので、契丹語はそのひとつであったわけである。

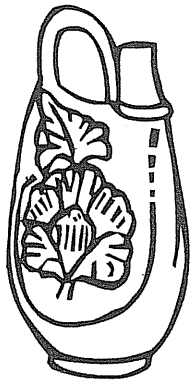
契丹族のはなしていたパラモンゴル語はプロトモンゴル語とはどのぐらいちがったかということはまだ全然わからない。しかし、契丹文字の解明やほかの契丹語関係研究ではこのちがいを是非みとめられなければならない。契丹小文字の解決のまえに、契丹語について多分一番役にたつ資料が現在蒙古諸語ではなくて、となりの満州語からでてくるとおもう。遼代と金代のとき女真語におそらく契丹語からの外来語がおおくはいったとおもわれるが、その一部が現在の満州語にものこっている。この外来語と現在蒙古諸語の比較研究は、これまでよりももっとくわしくやらなければならない。

参考文献

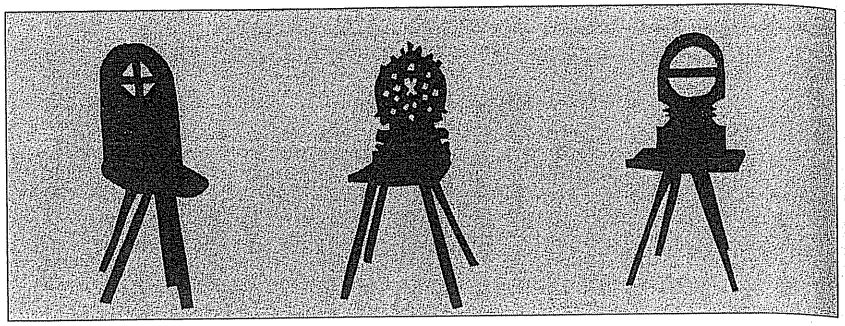
島田正郎
一九九三『契丹国――遊牧民のキタイの王朝』東方書店。

Janhunen Juha
1994 "On the formation of Sinitic script in mediaeval northern China." *Journal de la Société Finno-Ougrienne* 85 : 107–124, Helsinki.

Wittfogel, Karl A. and Fêng Chia-Sheng
1949 "History of Chinese Society." *Liao* (907–1125). Transactions of the American Philosophical Society, N. S. 36, Philadelphia.



（第五研究部客員　ヘルシンキ大学教授）



民博通信　No.68（1995年3月）

目　次

評論・随想
電子図書館……長尾　真……2
インドネシアのドラえもんと「民族文化」……関本　照夫……14
ほん
朝倉敏夫著『日本の焼肉　韓国の刺身――食文化が〝ナイズ〟されるとき』……奥村　彪生
石川榮吉監修、大塚柳太郎・片山一道・印東道子編『オセアニア①　島嶼に生きる』……後藤　明……20
展示コーナー
特別展『絨毯――シルクロードの華』をおえて……杉村　棟……23
特別研究メモ
ことばの危機・民族の危機・人の危機――北方少数民族言語の直面する問題に関して……庄司　博史……36
共同研究メモ
『技術の比較文明学研究』……杉田　繁治
『数理民族学：その応用的研究』……杉藤　重信……54
共同研究会一覧表……58
各個研究メモ
近代における民具の変容　脱靴器をめぐって――特許・実用新案公報の調査から――……近藤　雅樹
一九六〇年代のポップ・スンダ……福岡　正太……81
館内合同研究会
ヨグヤカルタ王宮のスリンピ舞踊――振付の美的概念の考察……F・X・ウィダルヤント
契丹人はなに語をはなしていたか……ユハ・ヤンフネン……86
紀行・たより
マラムレシュの夏……新免光比呂……92
資料と情報
写真で見る日本統治期の台湾先住民の生活――瀬川孝吉氏の写真資料紹介……松澤　員子……96
館員の刊行物……107
研究部のうごき……

表紙デザイン・勝井三雄　カット・田主　誠